

人間に恋をした
猫の話

たなかひまわり

私は、圭に飼われている猫。

圭は十七歳の高校生の男の子。

圭が中学に入ったときに、私はこの家にもらわれてきた。

家族の中で、圭が一番私を可愛がってくれる。

だから、私は圭が一番好き。

私は毎朝、圭を起こす。

「ミャー」

圭の耳元で一鳴き。

でも圭は「うーん」となるだけで、すぐに寝息を立てる。

今度は圭の手を引っ掻きながら、さっきより少し大きな声で鳴いてみる。

「なんだ、ミー、もう朝か？もう少し寝かせて……」

圭はそう言ったと同時にまた寝る。

ホントに寝起きが悪い。でも、いつもの事。

さて最後の手段。

圭のお腹の上に乗ってピョンピョン飛び跳ねながら鳴き続ける。

「わかった！わかったよ、今起きるから」

そう言いながら私を抱き上げると、圭はやっとベットから降りる。

仕事、終了。

朝食も一緒。私の食事は圭が用意してくれる。

圭は食べるのが早い。トーストをあまり噛まずにコーヒーで流し込んでいる。

そして私がミルクを飲み終えないうちに、空になった皿を流しに運ぶ。

圭が制服に着替える間に私もなんとかミルクを飲み終えて、一緒に玄関を出る。

「ついてくんなよ、危ないから」

圭の言い方は優しすぎるから、私は言うことを聞かない。

ちょっとだけついて行く。

圭の学校は歩いて十五分の所にある。私の散歩コースには圭の学校が入っている。

授業中、誰も廊下に出ていない時間に、圭を見に教室まで行ったりもする。

ドアの隙間から圭を見ると、たいてい寝ている。

あれだけ朝はぎりぎりまで寝ているのに、まだ眠いんだろうか？

そのくせ、成績はいいらしい。

だから先生も圭の居眠りを黙認しているのかな。そんなわけないか.....。

授業中に溜めたエネルギーを圭は放課後、クラブ活動で発散する。

圭は陸上部で短距離の選手。

この前の大会で入賞できなかったことがよほど悔しかったらしい。

以来、がむしゃらに練習している。

走って、走って、倒れるまで走り続けて……。

自分の記録が少し伸びたくらいじゃ全然満足出来なくて、わざと自分の体に鞭打って、それでも足りないって、圭は思ってる。

私はこんな圭を見るのは、あまり好きじゃない。

自分と戦ってる時の圭は、私が近づくことの決して出来ない孤独という囲いの中にいるから。

走っている限り、圭はその囲いから出ることはない。

圭が夕方、学校から帰ってくる頃、私も帰宅。

私は圭がシャワーを浴びている浴室の前で座って待っている。

すると時々、「ミーも浴びろ」と言って、私を中に招き入れる。

正直言うと、私はシャワーが大の苦手。

でも、圭は綺麗好きだからじっと我慢。

目をぎゅっつつむって、水しぶきに耐える。

そんな私を見て、圭はいつも大笑いする。

笑い事じゃないのに！

夜はもちろん一緒に寝る。

と言っても、冬の寒い時期だけ。

あまり寒がらない圭は、寝入ると暑がって布団をはぐ癖がある。

私がいると尚更で、無理矢理ベットに潜り込んだ事で、圭が風邪をひいたことがあった。

だから、圭が呼んでくれた時だけベットに入るようにしている。

こうして、圭と私の一日が終わる。

ある朝、いつものように圭を起こそうとすると、ベットの脇に置いてある電話が小さくなった。

「もしもし……ああ、おはよう、今起きた」

ベットから手だけ伸ばして圭が誰かと話をしている。

こんなに早く誰？

私は圭にぴったり寄り添って聞き耳を立てた。女の子の声だ。

「ん？大丈夫だよ、もう寝ないって」

そう言いながら圭はまだ眠そうにしている。

圭が一度起こしただけで起きるわけがない。私は圭がもう一度、寝に入るのを期待した。

ところが。

「じゃ、学校で」

そう言って電話を切ると、私の思惑を裏切り、圭はすっと起き上がった。

顔を洗って制服に着替えると、食事も取らずに玄関を出て行った。

圭は一度も私を見なかった。こんな朝は初めてだ。

茫然と立ち尽くしている私の前に、圭のお母さんがミルクを置いた。

圭が出してくれるはずのミルク……。

それを考えたら涙が出そうになった。

とりあえず一口飲んだけど、胸がキュツとなっていて、これ以上は喉を通りそうもない。

私はお母さんに小声で鳴いて謝ってから、圭の部屋に戻った。

次の朝も、そのまた次の朝も圭の部屋の電話が鳴った。

圭はその度に飛び起きる。私が起こす前に。

そして、電話が鳴り始めた日を境に、圭は私を抱き上げなくなった。

圭に電話をしてくるのはいったい誰？

私は不安でいっぱいになった。

私は圭の帰りの時間に合わせて学校へ行った。

これまでのように、圭にかまってほしかったから。

門の前でじっと圭が出てくるのを待った。

いつしか、雨が降り出していた。

そんなことも気付かないくらい、圭のことばかり考えていた。

辺りがだんだん暗くなっていく。それでも圭は出てこない。

体が濡れているせいで、寒さを一層感じる。

すっかり陽が落ちた頃、圭が傘をさして校舎から出てきた。

私は圭の姿を見つけた途端、すごく嬉しくなって、水溜りの校庭を思い切り走った。

体に泥がついても構わない。あとで圭に洗ってもらえばいい。

早く圭のところへ！

やっと校庭の半分までたどり着いたとき、私の足は急に動かなくなった。

圭の隣に誰かがいる。赤い傘をさした髪の高い女の子だ。

圭の顔を見ながら楽しそうに笑っている。

圭も照れたように笑っている……。

きっと、ただの友達だよ。

私は心の中で自分を励ました。

だけど震える足で必死に立っている私に、圭はひどい仕打ちをした。

目の前まできても、女の子との話に夢中で私に気づかない。

泥だらけの私に振り向きもしない。

女の子のキーンとした声だけが、私を突き刺し通り過ぎていく。

ん？ 今の声、聞き覚えがある。

私は全身にまとわりついた不快な声を払い除けながら、記憶をだどった。

嫌な思い出のある声……。

そうだ。私から圭を奪った、あの電話の声だ。

圭の後ろ姿がだんだん小さくなって消えていく。

雨はさらに強く振り続ける。

私はこの日、家に帰るのをやめた。

三日後、さんざん迷ったあげく家に帰った。

すると圭がバタバタと部屋から出てきた。

「ミー、どこに行ってたんだよ。心配したぞ。あーあ、こんなに泥だらけになって……。おいで、洗ってやるから」

圭が以前の圭に戻っていた。

久しぶりだ、こんなに圭に優しくしてもらうの。

私は圭に体を洗ってもらいながらいっぱい泣いた。

今日はずっと圭のそばにいるんだ。

この何日か、一緒にいられなかった分ずっと……。

夜眠る時も、圭が招き入れる前にベッドにもぐりこんだ。

今日はいいよね。圭、風邪ひかないでよ。

月曜の朝。

電話がかかってくる前に圭を起こせばいいんだ。

そう思って、いつもより五分早く圭の耳元で鳴こうとした。

「……………」

???

声が出ない。

もう一度、たっぶり息を吸ってお腹に力を入れて……。

「……………」

どうしたんだろう？やっぱり声が出ない。

「……………」

何度鳴こうとしても、鳴くことが出来ない。

風邪で喉を痛めたような音にならない声が、私を空回りさせる。

とうとう五分経過。電話が鳴る。嬉しそうに話す圭。

圭のそばにいるのは私なのに。

圭を起こすのは私の役目なのに。

だけど圭の「おはよう」の言葉は、今日もまた、電話に向けられた。

声を失ってから、私は圭が学校にいるとき以外、片時も圭から離れなかった。

圭も私が帰らなかった日の事を少し気にしてくれていた。

家にいるときは必ず、膝にのせていてくれるようになった。

「最近、おまえ、鳴かないな」

そのことも判ってくれている。

だから圭を起こせなくなったこと、悲しいけど我慢する。

圭は何かにつけて私に同意を求める。

テレビを見ながら、

「これって違うよなあ、ミー」

とか、お母さんに小言を言われて、

「まったく、うるさいんだから。俺、悪くないよなあ、ミー」

とか。

今までだったら「ニャー」って言ってあげられたんだけど、今は返事の代わりに圭の手に頬ずりする。

こんな時も鳴かない私を変に思って、圭は一瞬私の顔を覗き込む。

でもすぐに頭を撫でてくれる。

私はどんな時も圭の味方。それは圭に伝わってるよね？

声の出ない生活に慣れた頃、私にあらたな災難が降りかかってきた。

圭が近くの公園のベンチで、あの女の子とおしゃべりをしている。

私はこの時も圭から離れない。

「可愛い猫ね。どこにでもついて来るんだ」

女の子が言う。ついでに私を手招きして抱こうとする。

私は女の子をキッと睨んだ。

ちょっとでも触ってごらん。尖った爪で引っ掻いてやるから。

でも、そんなことしたら圭にきつと叱られる。だから、大人しくしてる。

この二人と一緒にいる時、なるべく女の子の声は聞かないようにした。

圭が女の子にささやき掛ける言葉も、聞こえないように耳を伏せた。

二人の声が遠く響いている。

圭、私に話し掛けてよ。

私は心の中で叫んでいた。

やがて、二人の声がしなくなった。

でも、相変わらず二人の楽しそうな笑顔が私の目に映る。

私の心はぼろぼろだった。

辛いよ……。

私はこれ以上圭のそばにいられず、公園をあとにした。

家の玄関を上ったところで圭の帰りを待った。

なんだかとても疲れた。

いつの間にか眠ってしまった。

私は子猫に戻っていた。

面倒見のいい圭がそこに居る。圭の、私中心の生活。

そうよ、こうでなくっちゃ。

今、私は悪い夢を見ているのよ。あの女の子は悪い夢。

圭に思い切り甘えている、幸せな私がいた。

ふいに風を感じて目が覚めた。

圭だ。圭が帰ってきた。

圭の顔を見上げる。圭が何か私に言っている。

.....

聞こえない！

確かに圭が口を動かして私に何か言っているのに、それが何だかわからない。

あ然として身動きせずにいる私を、圭は不思議そうな顔をして置き去りにした。

私は聞きたくない音だけを消していたつもりが、すべての音を失ったのだ。

もう、圭の問い掛けに頼りすることもできない。

私は絶望に押し潰されそうだった。

ふらふらする足で圭のそばに行く。

ソファに座っている圭の膝にのった。せめて、圭の暖かさを感じていたかった。

鼻を近づけて圭の匂いを嗅いだ。

えっ？

私は慌てて顔を上げた。確かに圭だ。

だけど、きつい香水の匂いだけが鼻につく。

圭の匂いじゃない。あの、女の子の匂い？

私はソファから降り、自分の鼻を足で何度も何度もこすった。

こんな匂いなんて嗅ぎたくない。私が嗅ぎたいのは圭の匂い。

早く、この匂い、消えて！

次の瞬間、匂いがすっと消えた。

ほっとして、圭の元に戻る。そしてまた、圭の膝に体をうずめる。

深呼吸した私は愕然とした。

やっぱり、圭の匂いがしないのだ。

確かに香水の匂いは消えている。でも、圭の匂いもしない。

私は他の物の匂いも嗅ぎに行った。

プランターの花の匂い、果物の匂い、洗剤の匂い……。

駄目だ。どの匂いもわからない。

何も.....何もわからない.....。

私は大好きな人を奪われたショックで、声も、聴覚も、臭覚も失った。

そしてこの時ほど、人間であればよかったと思ったことはなかった。

人間であれば、圭を取り返すことが出来たかもしれない。

圭と同じ言葉で会話して、圭と同じ目の高さで物を見て、圭が感動するものに私も心を動かして、圭が落ち込んだ時は寄り添って慰めてあげられたかもしれない。

そうすれば、圭を取られることはなかったかもしれないのに。

.....そうでもないか。人間だって、失恋することもあるんだ。

淡い妄想が尽きた時、私は生きる気力を失った。

圭の部屋に行き、圭のベッドの上に乗る。

首を一振りして、黄色いリボンのついた鈴を落とす。圭が付けてくれた鈴。

鈴は小さく音をたて、圭の枕元まで転がった。

バイバイ、圭。

ありがとう。

圭のこと、ずっとずっと忘れないよ.....。

私は窓から遠い遠いところへ旅立った。

十年後、圭に子供が生まれた。

圭によく似た女の子だ。

圭は愛しそうにその子をあやしながら言った。

「こいつ、鈴が好きなんだよな。特にこの黄色いリボンのついてる奴。いつも持ってないと泣くんだよ」

完

人間に恋をした猫の話

<http://p.booklog.jp/book/91159>

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91159>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91159>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ